

白居易「長恨歌」の自己評價について

牛見真博

一、はじめに

「長恨歌」（卷一二・〇五九六）は、玄宗と楊貴妃との戀愛悲劇を描いた一大名篇である。元和元年（八〇六）盤屋縣尉時代に「長恨歌」を手がけた白居易は、後年作品に對する自己評價として次のような見解を示している。まず、元和十年（八一五）に十五卷本自撰集の編定を契機として、元稹と李紳に贈った「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」（卷一六・一〇〇六）では、^①

一篇長恨有風情

一篇の長恨風情有

十首秦吟近正聲

十首の秦吟正聲に近し

每被老元偷格律

毎に老元に格律を偷まれ

「元九向江陵日、嘗拙詩一軸贈行。自後格變（元九の江陵に向ふ日、嘗て拙詩一軸を以て行に贈る。後より格變ず。）」

苦教短李伏歌行

苦だ短李をして歌行に伏せしむ

「李二十常自負歌行、近見予樂府五十首、默然心伏（李二十常に歌行を自負するも、近く予の樂府五十首を見、默然として心伏す。）」

世間富貴應無分

世間の富貴應に分無かるべくも

身後文章合有名 身後の文章合に名有るべし

莫怪氣粗言語大 怪しむ莫れ氣粗にして言語の大なるを

新排十五卷詩成 新たに十五卷の詩を排して成す

という（「」内は白居易の自注）。ここで白居易は「長恨歌」を「秦中吟」とともに自己の代表作として掲げ、作品に對する自負を述べているが、一方、同年に自らの創作についての理論を示した「與元九書」（卷四五・一四八六）では、

今僕之詩、人所愛者、悉不過雜律詩與長恨歌已下耳。時之所重、僕之所輕。（今僕の詩、人に愛せらるる者、悉く雜律詩と長恨歌已下のみに過ぎず。時の重んずる所は、僕の輕んずる所なり。）としている。ほぼ同じ時期に、同一の人物（元稹）に宛てて記された「長恨歌」に對する兩様の自己評價は、どのように理解すればよいのだろうか。白居易研究においては、それぞれが頻繁に引用される記述であるにも関わらず、意外にもこの問題は長く等閑視され論じられなかった。小論前半では「長恨歌」に對する自己評價の齟齬を論じる前提として、その成立事情と主題を再検討する。そして、主題と成立事情の一端を踏まえた上で、白居易の「長恨歌」に對する自己評價の齟齬の原因について考えていきたい。

二、「長恨歌」の成立をめづつて

「長恨歌」の成立に關する第一義的資料としては、陳鴻「長恨歌傳」（『白氏長慶集』卷一二所收）が挙げられる。その末尾には次のように記されている。

元和元年冬十二月、太原白樂天自校書郎尉于盤屋。鴻與琅邪王質夫家于是邑、暇日相攜遊仙遊寺。話及此事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消

没、不聞于世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌、意者不但感其事、亦欲懲尤物、塞亂階、垂於將來也。歌既成、使鴻傳焉。世所不聞者、予非開元遺民、不得知、世所知者、有玄宗本紀在、今但傳長恨歌云爾。(元和元年冬十二月、太原の白樂天校書郎より盤屋に尉たり。鴻と琅邪の王質夫是の邑に家せり。暇日相攜へて仙遊寺に遊ぶ。話此の事に及び、相ともに感歎す。質夫酒を樂天の前に舉げて曰く、夫れ希代の事は、出世の才に遇ひて之を潤色すること非ざれば、則ち時とともに消没して、世に聞こえず。樂天詩に深く、情に多き者なり。試みに爲に之を歌うこといかん。樂天因りて長恨歌を爲り、意は但其事に感ずるのみならず、亦尤物を懲らしめんと欲し、亂階を塞ぎ、將來に垂れんとするなり。歌既に成り、鴻をして傳せしむ。世に聞えざる所は、予開元の遺民に非ざれば知るを得ず。世に知る所は、玄宗本紀に在る有り、今但長恨歌に傳するのみ。)

元和元年(八〇六)十二月、白居易、陳鴻、王質夫の三人が仙遊寺に集つた際、玄宗と楊貴妃の事跡に話題が及び、皆で語りそれに興じた。その席で王質夫は「希代の事」は優れた才能を得て「潤色」しなければ、「時とともに消没」してしまい、世に知られないことを憂えた。そこで「詩に深く、情に多き」白居易に、玄宗と楊貴妃の悲戀を歌につくることを勧めたとして、かなり具體的に制作に至るまでの事情が記されている。『文苑英華』(卷七九四)所收の「麗情集」「京本大曲本」にも同様の記述があるが^②、「長恨歌」が語りの場における嚆嚆を契機として成立したことは、同時期の傳奇小説の流れの上に「長恨歌傳」を置いてみることでより明らかにする。「長恨歌傳」の記載のみならず、大暦年間(七六六〜七九)以降にあらわれる傳奇小説には、その末尾の後記とも言うべき部分に作品成立譚の記されるものが多く、話型の著しい類型化も認められる^③。傳奇小説の制作過程としては、何らかの契機―話し手と聞き手、あるいは居合わせた人々が皆で話に

興じた語りの場—において、その場を支配していた人々の興味や關心に即した異説、異聞が語られ、それに基づいた記録なり創作をしているのである。

「長恨歌」制作時（八〇六年）、馬嵬の政變（七五六年）からは既に半世紀が経っており、「希代の事」とされる玄宗・楊貴妃故事が人々の間で語られ、何らかの語りとして客観的に存在していたことは、「長恨歌傳」の記述（「話及此事」）を待つまでもない。白居易、陳鴻、王質夫の三人が「相與感歎」した玄宗・楊貴妃故事は、正確な史實の探求を目的としたものではなく、正史と野史とを問わない街談巷説の範圍のものであったと思われる。おそらくは二、三の特徴的なあらわれを話題の中心に据えて、それぞれが聞き知っていると語る、話そのものに興じようとする場の雰囲気から呼び出されたものであったに相違ない。夙に指摘されることであるが、楊貴妃終焉の地である馬嵬は、陝西省興平縣の西に位置し、渭水を挟んで當時白居易の任地であった盤屋とはわずかの距離にある。同じく盤屋縣にある仙遊寺に三人が集ったとき、その酒宴の席に玄宗と楊貴妃の話題が呼び出されたことは、極めて自然な成り行きであったものと思われる^④。また馬嵬の事件から五十年が経過する間に、玄宗・楊貴妃故事は史實以外にも相似する戀愛悲劇としての特徴から、漢武帝・李夫人故事—『漢書』—の發想に依據した「反魂」のくだり—なども取り込み、人々の口承の末端に位置する内容も様々な形で含みながら重層化していったことだろう^⑤。「長恨歌」はそのような故事説話の素地の上に^⑥、語りの場を契機として白居易によって創作（＝文字化）されたものと考えられる。

三、主題について

ここでは「長恨歌」が當時の口承を背景として、一時の感興に基づき創作されたという觀點から

「長恨歌傳」との描かれ方を比較することで、兩作品が敘述の志向からして本質的に乖離していることを確認しておきたい。いま試みに、口承を背景とする作品を考察する際に、極めて示唆的な論著である川田順造『口頭傳承論』（河出書房新社、一九九二年）における「敘事詩的志向」「年代記的志向」の指摘を引用しながら、兩作品が有する性格の相違を比較してみる。まず敘事詩的志向とは、「情動的」な「語り」としての感興」（「話及此事、相與感歎」長恨歌傳）に基づく「口頭の構成」を有するものをいう。馬嵬の政變からちようど五十年が経過するにあたって、當時の人々の腦裏に玄宗・楊貴妃故事が強く意識されていたことは想像に難くない。さらに、從來様々に語られていた口承を文字化することには「讚美」「記念」「鎮魂」（「夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消沒、不聞于世」同前）といった意味合いが含まれていたと考えることも出來よう。また「過去を語り手が内在化」し、「實年代の無化」を圖るという點では、漢武帝と李夫人の故事に假託した作品であることが思い合わされる。正確な史實の追究を目的とせず、語りの場の感興が色濃く反映している「長恨歌」は、本質的に敘事詩的志向を有している。

一方、年代記的志向とは、内容の「敘述」「記錄」といった性格を有し、「知的な情報傳達性」（「世所不聞者、予非開元遺民、不得知、世所知者、有玄宗本紀在、今但傳長恨歌云爾」同前）を重視したものという。陳鴻「長恨歌傳」は、楊貴妃を「尤物」として諷諭の意識をあらわにしている（「意者不但感其事、亦欲懲尤物、塞亂階、垂於將來也」）、「内容の眞實性に關與」しているという點で、年代記的志向を有する作品であるとすれば、兩作品が持つ本質の相違は明らかである。このように考えれば、こと「長恨歌」における一連の「傳」と「歌」の關係は、それぞれに別々の役割を擔うものであったとも言えそうである。

「長恨歌」は十五卷本自撰集の四分類に従えば、詩人自らが「感傷詩」とする作品であるにも關

わらず、從來そのような主題の詩と意識され、論じられることが少なかった。その弊害について一々列挙することは煩瑣にもなるので避けるが、先行研究において、例えば丸山キヨ子「源氏物語と長恨歌」(『源氏物語と白氏文集』東京女子大學、一九六四年)のように、「長恨歌」が本來は感傷詩であるのに盛り上がり欠けるとし、それは「諷諭を優位とする道徳的分別が働いて作中人物の情感に深い感情移入をはばんでいるからであろう」と論じられる類の見解は後を絶たない。これは、楊貴妃を「尤物」^③とみる「長恨歌傳」の諷諭の意識を、「長恨歌」にまで持ち込んだ穿った見解である。陳鴻「長恨歌傳」は、白居易自身が述べているように「風情」^④を主とする「長恨歌」とは志向が異なるものであり、白居易の敘述意識を探ろうとする際には、兩者は切り離して考えなければならない。「長恨歌」の主題に關するこのような誤解は、作品の影響力が我が國にも多大であったがゆえに、日本文學研究にも支障をきたしかねない根の深さを包含している。

また、蹇長春「長恨歌主題平議」(『西北師大學報』社會科學版、一九九一年第六期)は主題に關する從來の諸説を、①隱事説、②諷諭説、③愛情説、④雙重主題説、⑤感傷説に分類し、それらを統合するところに主題の多層性を認めようとするもので、久しく進展を見なかった主題論爭解決に繋がる論考として注目された。しかし、蹇氏の論は一見合理的ではあるが、虚心に「長恨歌」を鑑賞すればただちに理解されるように、そこに主題の多層性など見出せるものではない。玄宗・楊貴妃故事を「潤色」した作品を、「情に多き」白居易に慇懃したという「長恨歌傳」の後記からも「長恨歌」に諷諭の意圖を見出すことはできず、むしろ軟派な戀愛作品以外の何ものでもない。それについて、さらに「長恨歌」に對する後人の詩評により確認しておきたい。

四、後人の詩評から

自己評價の問題に移る前に、從來の主題論争におけるねじれを正しておくため、後人による「長恨歌」の評價について觸れておく。まず宋の張邦基『墨莊漫錄』には、

白樂天作長恨歌、元微之作連昌宮詞、皆紀明皇時事也。予以謂微之之作過樂天、白之歌、止於荒淫之語、終篇無所規正。元之詞、乃微而顯、其荒縱之意皆可考、卒章乃不忘箴諷、爲優也。

（白樂天長恨歌を作り、元微之連昌宮詞を作る。皆明皇の時事を紀すなり。予以謂へらく微之の作は、樂天に過ぐ。白の歌、荒淫の語に止まり、終篇規正する所無し。元の詞、乃ち微にして顯われ、其の荒縱の意皆考ふべく、卒章乃ち箴諷を忘れず、優と爲すなり。）

とある。この評では、元稹「連昌宮詞」に軍配が上がるが、その判斷基準は「卒章乃ち箴諷を忘れず、優と爲すなり」と端的に示されているように諷諭の意圖の有無にある。同じく宋の張戒『歲寒堂詩話』には、

其敍楊妃進見專寵行樂事、皆穢褻之語。首云、「漢皇重色思傾國、御宇多年求不得」後云、

「漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲」又云、「君王掩面救不得、回看血淚相和流」此固無禮之甚。「侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時」此下云云、殆可掩耳也。「遂令天下父母心、不重生男重生女」此等語乃樂天自以爲得意處、然而亦淺陋甚。（其の楊妃進見して寵を専らにし行樂

するの事を敍ぶるは、皆穢褻の語なり。首に云ふ、「漢皇色を重んじて傾國を思ふ、御宇多年求むれども得ず」後に云ふ、「漁陽の鼙鼓地を動もして來たり、驚破す霓裳羽衣の曲」又云ふ、「君王面を掩ひて救ひ得ず、回りに血淚相和し流るるを見る」此れ固より無禮なること甚し。「侍兒扶け起こせども嬌として力無く、始めて是れ新たに恩澤を承くるの時」此の下云云、殆ど耳を掩ふべし。「遂に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ」此等の語乃ち樂天以て自ら得意の處と爲す、然れども亦淺陋甚し。）

とある。「長恨歌」中の「穢褻の語」が批判の対象となり、また「殆ど耳を掩うべき」、「淺陋」な作品としている。さらに、

長恨歌、在樂天詩中爲最下。連昌宮詞、在元微之詩中乃最得意者。（長恨歌、樂天詩中に在りて最下と爲す。連昌宮詞、元微之詩中に在りて乃ち最も得意とする者なり。）

とあり、『墨莊漫錄』の記述と全く同様に、「長恨歌」を「連昌宮詞」と比較した上で酷評している。

また宋の周密『容齋隨筆』も、

然長恨歌不過述明皇追愴貴妃始末、無他激揚。不若連昌宮詞有監戒規諷之意。（然るに長恨歌は明皇の貴妃を追愴するの始末を述ぶるに過ぎず、他に激揚するなし。連昌宮詞の監戒規諷の意有るにしかず。）

と指摘するように、「長恨歌」が玄宗の楊貴妃を追慕する顛末を述べただけの作品で、あえて取り沙汰されるほどの作品ではないとする。翻つて、清の趙翼『甌北詩話』には、次のようにいう。

長恨歌一篇、其事本易傳、以易傳之事、爲絕妙之詞、有聲有情、可歌可泣、文人學士、既歎爲不可及、婦人女子、亦喜聞而樂誦之、是以不脛而走、傳遍天下。（長恨歌一篇、其の事本より傳はり易し、傳はり易きの事を以てて絶妙の詞と爲す。聲有り、情有り、歌うべく、泣くべく、文人學士、既に歎じて及ぶべからずと爲し、婦人女子、亦喜び聞きて之を樂誦す。是を以て脛らずして走り、傳へられて天下に遍し。）

「長恨歌」は、玄宗・楊貴妃故事といった題材からして、人々に傳わりやすいものであったのであり、それを「絶妙の詞」に仕立て上げたために、「文人學士」の「歎じて及ぶべから」ざる作品として廣く天下に流布したのだとするのであるが、さらに次のようにいう。

長恨歌自是千古絶作、其敍楊妃入宮、與陳鴻所傳選自壽邸者不同、非惟懼文字之禍、亦諱惡之義、本當如是也。惟方士訪至蓬萊、得妃密語、歸報上皇一節、此蓋時俗訛傳、本非實事。……

…特一時俚俗傳聞、易於聳聽、香山竟爲詩以實之、遂成千古耳。（長恨歌自是千古の絶作なり。其の楊妃入宮を敍ぶるに、陳鴻所傳の壽邸より選ばれし者と同じからざるは、惟だ文字の禍を懼るるのみにあらずして、亦惡の義を諱むは、本より當に是の如かるべし。惟だ方士訪ね蓬萊に至り、妃の密語を得て、歸りて上皇に報ずるの一節のみは、此れ蓋し時俗訛り傳へ、本より實事にあらず。……特に一時の俚俗傳聞、聳聽し易く、香山竟に詩を爲すに以つて之を實とし、遂に千古と成すのみ。）

趙翼は「長恨歌」が當時の「俚俗傳聞」に想を得た創作であつたことを指摘した上で、「千古の絶作」として高い評價を與えている。『墨莊漫錄』では「荒淫の語」、同じく『歲寒堂詩話』では「穢褻の語」と評價される一方で、『甌北詩話』においては「絶妙の詞」であるとされる。しかし、これらの後人による評價の齟齬は、いずれも「長恨歌」を軟派な戀愛詩であることを認めた上での發言であり、そこに諷諭の意圖など見てはいない。以上のことから、自己評價の問題を検討するに際しても、まず「長恨歌」を「感傷詩」として捉えていくことが前提となる。

五、「感傷詩」に對する態度

これまでの考察を踏まえた上で、緒論にとどめていた自己評價の問題について改めて考えていきたい。前出の「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」では、感傷詩である「長恨歌」と、諷諭詩である「秦中吟十首」が對句表現で掲げられる。これは「與元九書」に、「諸妓見僕來、指而相顧曰、此是秦中吟長恨歌主耳」（諸妓僕の來るを見、指して相顧みて曰く、此れ是秦中吟長恨

歌の主のみ。」とする記述とも對應している。そして、續く自注の箇所でもやはり諷諭詩である「新樂府五十首」に對する自負を述べる。ここでは「感傷詩」を代表する「長恨歌」と「諷諭詩」の作品群が對置されながらも、自負心の上では兩者が矛盾なく共存していたことを確認しておくべきであろう。そこで、まずは白居易の「感傷詩」に對する態度を検討することで、當該問題解決の糸口を見出していくことにする。

自撰集の編定に際して、約八百首を「諷諭詩」「閑適詩」「感傷詩」「雜律詩」に白居易自らが四分類していることは周知のことである⁽¹⁾。四分類については「與元九書」に、

僕數月來、檢討囊裏中、得新舊詩、各以類分、分爲卷目。自拾遺來、凡所遇所感、關於美刺興比者、又自武德訖元和、因事立題、題爲新樂府者、共一百五十首、謂之諷諭詩。又或退公獨處、或移病閑居、知足保和、吟詠情性者、一百首、謂之閑適詩。又有事物牽於外、情理動於內、隨於感遇、而形於歎詠者、一百首、謂之感傷詩。又有五言七言、長句絕句、自一百韻至兩韻者、四百餘首、謂之雜律詩。凡爲十五卷、約八百首。(僕數月來、囊裏中を檢討するに、新舊の詩を得、各類分を以つてし、分ちて卷目を爲す。拾遺よりこのかた、凡そ所遇所感、美刺興比に關する者、又武德より元和に訖る事に因りて題を立て、題して新樂府と爲す者、共に一百五十首、之を諷諭詩と謂ふ。又或ひは公より退きて獨り處し、或ひは移病閑居し、足るを知り和を保ちて、情性を吟詠する者一百首、之を閑適詩と謂ふ。又、事物の外に牽き、情理の内に動き、感遇に隨ひて歎詠に形わるる者一百首有り、之を感傷詩と謂ふ。又、五言七言、長句絶句の一百韻より兩韻に至る者四百餘首有り、之を雜律詩と謂ふ。凡そ十五卷を爲す、約八百首。)

とある。そのうち「感傷詩」については、「又、事物の外に牽き、情理の内に動き、感遇に隨ひて

歎詠に形わるる者一百首有り、之を感傷詩と謂ふ」と定義している。これは『詩經』大序の「情中に動きて言に形わる」を踏まえており、感傷詩も詩の本来の姿と違わないと考えていた白居易の意識が窺える。「感傷」の語については、白居易以前の意義と用法からも、何事かを契機として起る悲哀の感情であることは明らかである。折に觸れて悲しむことは人として自然の理であり、白居易の詩作における「感傷」語の意義と用法もこれと違わない⁽¹⁾。また「與元九書」における次の記述も、「感傷詩」に向けられる白居易の意識を探索上では示唆的である。

此誠雕蟲之戲、不足爲多、然今時俗所重、正在此耳。雖前賢如淵雲者、前輩如李杜者、亦未能忘情於其間哉。（此れ誠に雕蟲の戯れにして、多と爲すに足らず、然れども今時俗の重んずる所、正に此に在るのみ。前賢の淵雲の如き者、前輩の李杜の如き者と雖も、亦未だ情をその間に忘るること能はず。）

前賢の王褒、楊雄、前輩の李白、杜甫のような詩人においても、作品の主題に「情」を詠み込まないことはなかったと述べて、詩人の至極當然な營みとして感傷詩の制作を位置付け、肯定している。また、後年（太和八年）の作になるが、白居易の感傷詩に對する意識をさらに端的に述べているものに「序洛詩」（卷六二・二九四二）がある。

予歷覽古今歌詩、自風騷之後、蘇李以還、次及鮑謝徒、迄於李杜輩、其間詞人、聞知者累百、詩章流傳者鉅萬。觀其所自、多因讒冤譴逐、征戍行旅、凍餒病老、存沒別離、情發於中、文形於外。故憤憂怨傷之作、通計今古、什八九焉。（予古今の歌詩を歴覽するに、風騷の後より蘇李以還、次に鮑謝の徒に及び、李杜の輩迄、其の間の詞人、聞知する者累百、詩章の流傳する者鉅萬なり。その自る所を觀るに、多く讒冤譴逐、征戍行旅、凍餒病老、存沒別離に因りて、情中に發し、文外に形わる。故に憤憂怨傷の作、今古を通計すれば、什に八九なり。）

「憤憂怨傷の作、今古を通計すれば、什に八九なり」として、伝統的な文學の流れの上に、感傷を含む「憤憂怨傷」の詩を肯定する意識がはつきりと自覺されている。このような意識は自撰集四分類の段階においても、すでに白居易の内に宿っていたのではないかと思われる。古の詩人たちが皆そうであったように、折に觸れての悲哀の感懷の表出は、人として當然の情であり、營みであることを白居易自身も例外なく認めている。「感傷詩」は、「與元九書」における位置付けでは貶められている。しかし、白居易の意識を俯瞰する際には、むしろそれが詩の本然の姿を示しているとの、強い自負を有していたことが確認されるのである。それは「感傷詩」中の代表作である「長恨歌」についても同じことが言えるはずである。

それでは「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」において、白居易がその冒頭から「一篇の長恨風情有」と掲げるほどの「長恨歌」に對する自負心は、一體どのような内面的な感懷に根ざしていたのであろうか。このことについては、白居易の詩文には玄宗治世の往時を知る人々が對話者として登場し、その知悉するところを語るといふ例が多いことに注目すべきである⁽¹⁾。縣尉時代の「長恨歌」に始まり、左拾遺時代の「上陽白髮人」(卷三・〇一三一)、さらに江州左降の際に成ったとされる「琵琶引」(卷一二・〇六〇二)、江州司馬時代の窮境から老樂叟を同情的に捉えた「江南遇天寶樂叟」(卷一二・〇五八二)に至るまで、年數では實に十年餘りにわたり玄宗盛時と通時性を有する人々から、その知悉するところを仄聞し、それに基づいた詩作を行っている。白居易においては、詠詩の對象といい、それに向けられる意識といった點で一貫していることが見て取れる。同様の詩例は、元稹をはじめとする中唐の文人の詩文においても散見する⁽²⁾。當然のことながら、往時を知る人々は既に高齢であり、何とか玄宗盛時を仄聞しておこうとする風潮は否應なく高まっていたものと思われる。そこに當時の時代的氣分といったものも濃厚に感じられ

る。また白居易は李白と杜甫の文學を、詩壇における最高峰のものとして傾倒しており⁽¹⁴⁾、あるいは開元年間以來の古木を詠詩の對象とするなど⁽¹⁵⁾、白居易はその背景に盛唐の息吹きを伝えるものに對して、並々ならぬ感懷を抱いていたことが窺える。

また、玄宗と楊貴妃の戀愛悲劇を象徵性に富む時代の悲劇と見れば、その時代への感傷という側面も大きく取り上げられる⁽¹⁶⁾。唐王朝の繁榮と没落の轉換が餘りに劇的であつたために、その象徵的意義に富む形象を詠出し、抑え難い感傷的情緒を伝えんとする白居易の態度は「長恨歌」に結實しているように思われる。それは玄宗と楊貴妃の戀愛悲劇にとどまらず、盛唐そのものに對する鎮魂歌とでも言うべき、抑え難い「長恨」であつたとも言えるのではないか。「長恨歌」は、それほど強い内面的感懷に基づいて制作された作品であつたと考えられる。そのような「長恨歌」が、「與元九書」において低い評價しか與えられないのは、その書簡の性格がまた別に考えられなければならないことに起因している。そのため、「與元九書」に見られる敘述意識についても觸れておかなければならない。

六、「與元九書」の敘述意識

ここでは「與元九書」が、白居易のどのような意識のもとに記されたのかという點に絞つて検討すること、で、「長恨歌」を代表作とする「感傷詩」の作品群に對して、それを低く見なす自己評價が白居易のいかなる意識に基づいていたのかについて若干の考察を加える。そもそも「與元九書」が執筆された直接的な契機は、左遷による「窮」の意識からである。白居易が江州に貶せられたのは、元和十年（八一五）六月三日に起きた武元衡暗殺事件に端を發する。事件後直ちに、暗殺犯逮捕を求める上書を奉じた白居易は、それが太子左贊善大夫の職分を越えた越權行爲であると誹謗さ

れた。これにより白居易は、藩鎮政策を背景とした政治的思惑も絡んだ貶謫處分となる。しかもその決定が、中書舍人王涯の論疏によるものであったことが白居易をより愁苦させた。王涯は、元和三年（八〇八）の制科の問題に絡み、左遷の憂き目を見た人物であるが、その際の處分に異議を唱え、弁護の上書（「論制科人狀」（卷四一・一九四八））を奉じたのは他ならぬ白居易であったからである。正義感から出る諫言や擁護が、このような誹謗や惡意に姿形を變えて自らを貶謫させることは、實に不可抗力としか言いようのない諦念と憂悶を懷かせる處分であつたに相違ない。同年八月、白居易は長安を出立し、左降のため江州に赴いた（一）。「與元九書」は、その年の暮れに書かれている。

江州司馬への左降は、それまで比較的順調な官吏生活を送ってきた白居易にとって、最初の「屯窮」であつた。すでに編み終えた十五卷の自撰集は、それまでの創作活動が自らの足跡と軌を一にし、半生の經歷を省みるものとなつたであろう。これまでの創作活動を振り返り、しかも現在の自作に對する世評に觸れる中で、すでに身後に名を残す詩人として『詩經』以來の長い文學の傳統の上に、自らを位置付ける自負を抱いていたことが窺える。「今の屯窮、理固より然りとするなり」とし、詩人にとって「屯窮」は當然のごとく付きまとうものであるという意識は、すでに名聲を得た詩人としての、自信と自負の裏返しとも理解されよう。その自信と自負を支えたのは、一連の諷諭詩の作品群である。白居易にとつての「諷諭詩」とは、『詩經』以來の詩道の復活を目指したものであり、諫官として、また同時に詩人として大道を歩む、誇りと責務を存分に發揮し得た作品群であつた。「諷諭詩」にかける意氣込みについては、「與元九書」に次のように記されている。

自登朝來、年齒漸長、閱事漸多、每與人言、多詢時務、每讀書史、多求理道、始知文章合爲時而著、歌詩合爲事而作。（登朝より來、年齒漸く長じ、閱事漸く多く、人と言ふ毎に多く時務

を詢ひ、書史を讀む毎に多く理道を求め、始めて知る、文章は合に時の爲に著すべく、歌詩は合に事の爲に作るべきを。」

登朝して以來、諫官の立場を全うしようとする意識が生じたことを述べている。そして白居易は、實際にも諷諭精神に溢れた實作を伴い、その意氣込みどおりの活躍を見せた。「新樂府」五十首中の最後に置かれる「采詩官」詩（卷四・〇一七四）には、次のようにある。

周滅秦興至隋氏 周滅び秦興りて隋氏に至る

十代采詩官不置 十代采詩官を置かず

郊廟登歌贊君美 郊廟の登歌は君の美を贊し

樂府豔詞悅君意 樂府の豔詞は君の意を悦ばしむ

若求興諭規刺言 若し興諭規刺の言を求むるも

萬句千章無一字 萬句千章に一字無し

不是章句無規刺 是章句に規刺無からざるも

漸及朝廷絶諷議 漸く朝廷の諷議を絶つに及ぶ

（中略）

君兮君兮願聽此 君や君や願わくは此れを聽け

欲開壅蔽達人情 壅蔽を開きて人情に達せんと欲すれば

先向歌詩求諷刺 先ず歌詞に向かひて諷刺を求めよ

詩の前書きには、「前王亂亡の由に鑑みるなり」とある。「采詩官」が置かれなくなつてより、天子を諷すような言葉は千章萬句の中に一字としてなく、次第に朝廷から諷刺の議論は絶えてしまつたことが歎かれる。そこで天子には、歌詩の中に諷刺の言を求めるべきであることをいう。白居易

易は諷諭詩について、第一の讀者を時の憲宗皇帝においていたが、その理由の一端は自らの諷諭の信念と實作を支援し、いわば公的な性格を帯びた形での、諷諭詩制作の契機を與えられていたためであろう。その邊りの經緯を『舊唐書』白居易傳は、次のように傳えている。

章武皇帝、納諫思理、渴聞讜言、二年十一月、召入翰林爲學士、三年五月、拜左拾遺。居易自以逢好文之主、非次拔擢、欲以生平所貯、仰酬恩造。(章武皇帝、諫を納れ理を思ひ、疲言を渴聞し、二年十一月、召して翰林に入れ學士と爲し、三年五月、左拾遺を拜す。居易自ら好文の主に逢ひ、非次に拔擢せられ、生平に貯ふる所を以て、仰ぎて恩造に酬いんと欲す。)

諷諭詩にかける並々ならぬ意氣込みは、このような人事の拔擢を行った憲宗に對する恩義に報いるために、自らの職務を忠實に果たそうとするものだった。そして「始めに名を文章に得」た白居易にとつては、自らの詩才を最大限に發揮させることが、中央における自己の存立基盤を築き上げることとも同義であつたはずである。翻つて、貶せられて間もない頃の意識が窺えるものとして、「謫居」詩(卷一六・〇九〇九)を掲げる。

面瘦頭斑四十四

面は瘦せ頭は斑なり四十四

遠謫江州爲郡吏

遠く江州に謫せられ郡吏と爲る

逢時棄置從不才

時に逢ひて棄置せらるは不才に従り

未老衰羸爲何事

未だ老いざるに衰羸するは何事の爲か

火燒寒澗松爲燼

火は寒澗を燒き松は燼と爲り

霜降春林花委地

霜は春林に降りて花は地に委つ

遭時榮悴一時間

時に遭ひて榮悴するは一時の間

豈是昭昭上天意

豈に是れ昭昭たる上天の意ならんや

遠く江州に謫せられた原因は、自らの「不才」によるものとしながらも貶謫後間もない時期の白居易は、この「窮」なる情況も一過性のものであり、いずれまた「昭昭たる上天の意」によつて窮境から抜け出せるものと考えていたようである。従前になく窮境に置かれながらも、白居易にそのような希望を抱かせたのは、ここに至る半生の文學活動における堂々たる自負と、多大な成果を挙げたことによる自信に基づいていたからに違いない。自らの眞價は「諷諭詩」にこそあり、これらの作品群を有することが中央政界における自己の存立基盤であると考えていたのではないか。貶謫當初の白居易にとつて「諷諭詩」の作品群こそは、いづれ自らを再び政界に押し戻し、支えてくれるはずの作品群であり、いわばよすがとしての存在であつた。しかし、左降により「諷諭詩」實作の積極的な意義を失つた白居易が、次に力を入れようとしたのは「閑適詩」であつた。「與元九書」にも、自己を律するために「足るを知り」、心の「和を保つ」ことは今後の處世のために必要な指針であり、それが「閑適詩」の制作意義としても強く打ち出されている。

當時、白居易が置かれていた状況からすれば「諷諭詩」「閑適詩」の作品群が、貶謫後まもなく書かれた「與元九書」において、當時の「窮」なる情況を受け入れながらも、自己の存在を肯定し、支えながら、同時に詩作の次の段階を見据えて記されたために、四分類の上位に位置付けられるのはいわば當然の歸趨であつた。「諷諭詩」「閑適詩」は、士大夫としての内省を経た作品群である。そのような過程を経ることのない直接的な詠歎としての「感傷詩」「雜律詩」の諸篇は、厳しい現實と對峙した際には、取るに足らない雑多な作品群にさえ思われたのだろう。執筆時の敘述意識や白居易の置かれた状況を考慮することなく、「與元九書」に見られる當該箇所の自己評價の記述を鵜呑みにすることは、いささか早計であろう。そのため、同書の記述で白居易が「長恨歌」を、低く評價していたと考えることは出来ないのである。

七、まとめ

小論は、白居易の「長恨歌」に對する自己評價について、一方では誇らしげであり、また一方では低い評價を下している記述を取り上げ、詩人の意識のうちに潜む矛盾に迫りたいと考えた。そのために、まず作品の成立事情にまで遡ることで、「長恨歌」が私的な語りの場における一時の感興と、他人からの慫慂に基づいて成立した「感傷詩」であることを追認した。

しかし、内容の面からは軟派とも思われる私的な戀愛作品が、結果的に最も多くの人々に讀まれ、廣く流布したという事實を、翰林學士・左拾遺といった公的な立場に身を置く白居易が潔く受け入れ、聲を大にして自負することには、幾らかの戸惑いがあったように思われる。白居易にとつては、公的な性格が強い「諷諭詩」の作品群に對置される自己評價の葛藤の對象こそが「感傷詩」としての「長恨歌」であつた。「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」において、詩題に含まれる「戲に贈る」とは、正式な作品ではないという斷り書きでもある。そのような私的な發言の場において、ようやく吐露し得る「長恨歌」に對する自負心そのものに、作品の自己評價に搖れる白居易の心底を見る思いがする。ただし、失われた盛時に對する抑え難い感情を懷く白居易にとつて、その象徴的意義に富む玄宗・楊貴妃故事は、彼自身の關心の高さから言えば、詠詩の對象としての内的動機には充分なものがあつた。また言語面からも、誰にでも理解される詩作を心掛けていたとされる白居易にとつて、説話や俗語を取り込みながらの平易な作品が、廣く人口に膾炙したことは満足のことでもあつたはずである。

一方、「與元九書」において「長恨歌」の自己評價を貶める理由には、江州司馬への左遷がその契機として擧げられる。白居易にとつては、それは生活云々よりも、むしろ左遷という事實そのも

の大きな「屯窮」であつたに相違ない。左遷を人生における大きな凋落として意識すればするほど、逆に再復歸への執着にも並々ならぬものがあつたことが窺える。そのため、「長恨歌」を低く見なす自己評價を理解する鍵は、中央政界への再復歸ということになるであろう。江州の窮境と向き合つたとき、再び中央に復歸する望みをかけられるのは、「與元九書」において自負している「諷諭詩」の作品群であり、また今後の處世の指針と考えた「閑適詩」の作品群であつた。實際には、四分類における「諷諭詩」「閑適詩」と「感傷詩」の分類概念は相容れないものではなく、白居易はいずれも「詩道」に沿う作品として意識していたものと思われるが、「感傷詩」である「長恨歌」は、江州左遷の窮境と向き合つた一時期、取るに足らない作品として意識された。白居易が自らを政治家であり、また諷諭詩人であると公的な立場を自任するとき、おのずと「長恨歌」は自作の下位に位置付けられることになつたのだろう。以上のことから、白居易にとつての「長恨歌」とは、内に秘めた強い自負さえもなかなか公言しにくい、葛藤をともなつた作品であつたと言えるのではなからうか。

〈 注 〉

(1) 白居易詩は『白氏長慶集』（四部叢刊本）を底本とし、併せて朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）を参照した。また四部叢刊本の巻次に加えて、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（修訂版、朋友書店、一九七四年）「總合作品表」による作品番號を付した。

(2) 該當箇所には「元和年冬、太原白居易尉于盤屋。予與琅邪王質夫、家仙游谷。因暇日攜手入山、質夫於道中語及於是。白樂天深於思者也。有出世之才。以爲往時多情、而感人也深。故爲長恨詞以歌之、

使鴻傳焉。」（元和年冬、太原の白居易整屋に尉たり。予と琅邪の王質夫、仙游谷に家せり。因りて暇日手を攜へて山に入り、質夫道中に於いて、語ることは及ぶ。白樂天は思ひに深き者なり。出世の才有り。以爲へらく往時の多情、人を感じしめるや深し。故に長恨詞を爲りて、以て之を歌ひ、鴻をして傳せしむ。）とある。成立事情に關する雙方の記述については、資料の原型をめぐる問題として議論が交わされており、その間の事情については靜永健『白居易諷諭詩の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）第三章「縣尉時代の白居易」の注記（一九）に詳しい。但し、この小論においては、いずれの記述が原型であるかという比較の觀點からではなく、むしろ雙方の記述内容の重複部分に關しては制作の経緯を色濃く反映しているという見地から検討を加える。

（3）このことについては、澀谷譽一郎「白居易の周邊と傳奇」（『白居易研究講座』第二卷、勉誠社・一九九三年）を参照されたい。この論考は當時の傳奇小説を特徴づける後記の存在に着目することが、いかに重要であるかについて示唆的である。なお、澀谷氏論考における作品選錄以外に、李公佐「南柯太守傳」（『太平廣記』卷四七五）の「公佐、貞元十八年秋八月、自吳之洛、暫泊淮浦、偶觀淳于生貌、詢訪遺跡、翻覆再三、事皆摭實、輒編錄成傳、以資好事」も同様の例として挙げられる。

（4）近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院、一九八一年）、太田次男『白樂天』（集英社、一九八三年）。

（5）川合康三「長恨歌について」（金谷治編『中國における人間性の探求』所收、創文社、一九八三年）は、「長恨歌」は（i）史書の記録による歴史的事實、（ii）「開元の遺民」が語るような口頭傳承、すなわち民間に派生した説話的部分、（iii）白居易の創作部分、の三層に分かれており、後部については「口頭で傳承されていた話柄」に基づくであろうと述べている。

（6）當時、玄宗・楊貴妃故事が廣く語られ、「長恨歌」制作と享受の共通の基盤が整っていたことは、「長恨歌傳」の次の記述から窺える。すなわち王質夫が仙遊寺の會において「夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消沒、不聞于世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之如何。」と述べるのは、そ

れが一旦世に問われれば、必ず多くの人々に受け容れられるという認識に基づいていたからである。

- (7) さらにいえば、「長恨歌」と「長恨歌傳」のごとく「歌」と「傳」がセットになった例として、李紳「鶯鶯歌」・元稹「鶯鶯傳」、白居易「任氏行」(逸文で、「燕脂漠漠桃花淺 青黛微微柳葉新 玉爪蒼鷹雲際滅 素牙黃犬草頭飛」の句が残る。花房氏前掲書参照)と沈既濟「任氏傳」、元稹「李娃行」と白行簡「李娃傳」が挙げられる。これらのうち、元稹「鶯鶯傳」については、陳寅恪「元白詩箋證稿」(『陳寅恪史學論文選集』所收、上海古籍出版社、一九九二年)が、『舊唐書』「德宗紀」の貞元十五年十二月庚午、さらに丁酉の記述と對照した上で、元稹に關わる事實を記したものと指摘する。これも、「傳」が内容の「敘述」「記錄」といった性格を有し、「内容の眞實性に關與」している例と考えることができる。 「歌」と「傳」の間に、敘述の志向における統一性なるものが果たして見られるかどうか、ここでは問題提起にとどめ、今後の課題としたい。なお、下定雅弘「日本における白居易の研究(戦後を中心に)上―『文集』の校勘及び諷諭詩・「長恨歌」の研究―」(『帝塚山學院大學研究論集』二三、一九八八年)は、先學諸氏による「長恨歌」主題論争の流れを概説している。

- (8) 「尤物」の語をめぐるのは、柳瀬喜代志「復古の詩と長恨歌傳・鶯鶯傳に見える楊貴妃の像」(『學術研究―國語・國文學編』第二三號、早稻田大學教育學部、一九七四年)。

- (9) 諸田龍美「白居易「風情」考」(『九州中國學會報』第三六卷、一九九八年)。「風情」の語については、王汝弼氏や霍松林氏をはじめとする研究者によつて「風人の情」と解釋する「諷諭型解釋」が行われることで、「長恨歌」の主題論争に諷諭の意圖を認めようとする見解の根據になってきた。しかし諸田氏は『白氏文集』における「風情」の用例に検討を加え、「風情」の語義には諷諭の含意のないことを指摘し、從來の誤謬を正している。

- (10) 成田靜香「白氏長慶集の四分類の成立とその意味」(『集刊東洋學』六一、一九八九年)、同「白居

- 易の詩の分類と變遷」(『白居易研究講座』第一卷、勉誠社、一九九三年)。
- (11) 下定雅弘「白居易の感傷詩」(『帝塚山學院大學研究論集』第二四號)。
- (12) 竹村則之「白居易と天寶の遺民―贈康叟詩をめぐって―」(『文學研究』第八十四集、九州大學、一九八七年) 參照。
- (13) 元稹の「連昌宮詞」に、「…宮邊老人爲予泣 小年進食曾因入 上皇正在望仙樓 太眞同凭欄干立樓上樓前盡珠翠 炫轉熒煌照天地 歸來如夢復如癡 何暇備言宮裏事…」(『元氏長慶集』卷二四)とあり、玄宗と楊貴妃を目の當りにした「宮邊の老人」によつて往時が語られる。また「行宮」詩でも、「寥落古行宮 宮花寂寞紅 白頭宮女在 閑坐說玄宗」(『元氏長慶集』卷十五)とあり、玄宗の事跡を行宮に仕えていた「白頭の宮女」が語る様子を詠んでいる。
- (14) 「讀李杜詩集因題卷後」(卷一五・〇九〇〇)。
- (15) 「勤政樓西老柳」(卷十九・一二六四)に、「半朽臨風樹 多情立馬人 開元一株柳 長慶二年春」とあり、玄宗が政務を執つた勤政樓の西に植えられる開元年間以來の老柳について記している。
- (16) 蹇氏前掲論文および竹村氏前掲論文。
- (17) この間の事情については、布目潮風「白樂天の官吏生活―江州司馬時代―」(『立命館文學』第一八〇號、一九六〇年)に詳しい。